# 書評

佐藤泰正著

「近代日本文学とキリスト教・試論」（創文社刊）

大岡昇平

私たち作家は自分の作品について、ずいぶん色々な批評を受けます。作家も人間ですから、ほめて貰えばうれしく、けなされれば癪にさわります。しかしありがたいことに、こういう感情はたいてい、あまり長持ちせず、一日か二日ですぎてしまいます。

しかしこの頃は作品を作家の人間と結びつけて論じる批評がはやります。まるで私の心の中に住んでいるかのように、私の失敗は、私のかくかくの経歴に、かくかくの本性の重なった結果生じた、などと書かれると、なんだか、自分の体をなぜ廻されるような不快を感じます。

無論そのような批評にも、思い当る節があり、自省の機になることもありますが、なんかちがう筋をもされるような、くすぐったさがあって、この方は少し後を引きます。

拙作「野火」について、特に批評は混乱していました。しばしば詳細に論じられる機会が多いだけに、私としては、このくすぐったさを感じることが多かった。特にこの作品中キリスト教の神に関する点について、多くの批評家はキリスト教を知りませんので、実にとんちんかんなことが書いてありました。

私は作家の中では、わりあい評論や随筆を書く方で、ずいぶん批評家とやり合ったこともありますが、「野火」に

ついて、私は一切答えていません。

その理由は次の三つでした。

一、この作品は正にその点について、根本的未熟であること。

二、キリスト教を知らない批評家に、どうせ通じはしない。

三、その根本的なことを書くのは、なんとなくはずかしい。

去年それまで存じ上げなかった佐藤泰正先生から「近代日本文学とキリスト教」を贈られましたが、その中に拙作に触れた章があり、それは、これまでの私の不満を癒し、また教えて下さるものでした。先生の労作は、芥川龍之介から中原中也に到る、日本の近代文学の中に、キリスト教の底流、そのさまざまの形態を探られたもので、拙作はその一つのささやかな引用例にすぎませんが、私ははじめて拙作の一番大事なところに、触れられたと感じました。

私は現在信仰を持っていませんが、青山学院中学時代聖書を知り、それは私の心に影を落しているのを知っています。不幸にして、その後私の智慧はそれを否定するように働き、同じ智慧を使って小説を書いて、日々の糧を得ているのですが、私は「神に栄あれ」という句で結んだ小説を一つ書けたことに、誇りと喜びを感じています。

このようなことを、世智辛いわれわれの仲間の中でいうと笑われますから、友達にも言ったことはありません。しかしこれは私の子供の実感ですが、神と人との関係は、言葉にならないところで繋っているものです。信仰の言葉を言わないからといって、その人に信仰がないとは言えないと思います。先年正宗白鳥先生が亡くなった時も、臨終の受洗について、キリスト教を知らない批評家がずいぶんいろいろなことを言いましたが、彼等はこの点で全然間違っていました。

拙作が人に理解されないからといって、私はほんとうは不満はなかったのですが、こんど佐藤先生の御本によって、はじめて「知られた」よろこびを感じることが出来ました。

先生は同じ本で「中原中也」の神にも触れておられます。中原は私の古い友人で、生きてる間は、喧嘩ばかりしていましたが、死んで三十年近くなっても、彼はやはり私の前に笑っています。

その伝記を書きかけたこともありますが、これも中途です。なにか私は決定的な対決を避けているのです。私はその中で、しばしば中原の慢を責めましたが、これは私自身を責めるにほかありません。ここに焦躁が生れ、私の筆はどうやら亡友を責める様になると、不思議に生き生きとして来るのを、自分でも感じました。

中原についても、佐藤先生の御本によって教えられました。例えば彼の「羊の歌」の中の「祈り」について、多分焦躁から、私が見逃していた中原の魂のほかの面を指摘していただきました。

死の時には私が仰向かんことを！

この小さな顎が、小さい上にも小さくならんことを！

中原はいつも自分の顔では、顎が一番卑しいといっていました。

書いていてはきりがありませんが、私はすでに佐藤先生に私信でお礼を申上げました。この文章はその繰り返しですが、ちよっぴり私の告白も含んでおります。

遠藤周作

佐藤泰正氏の「近代日本文学と基督教試論」は教えられる所、多かった評論集である。この中で私の処女作品とも言うべき「堀辰雄論」はこっぴひどく、やっつけられているが、本人の私は、かえって興味と爽快感をもって読み、読売新聞に早速、このすぐれた評論集を紹介した次第だ。

私は自分の僅かな仕事をふりかえっても、日本においてキリスト教を信じつつ、小説を書くことの矛盾や困難がどんなに辛いものか、言わねばならぬ。あとの文学者に自分が「捨石」になるのか「踏石」になるのか、皆目わからない。佐藤氏の今後の仕事も同じような運命をたえず背負っていかれるだろう。私はしかしこの評論集をよみ、氏が私と同じように文壇でひとりぼっちで今後、仕事をせねばならぬだろうと思った。しかし佐藤氏も私も、自分の宿題をどこまでも追わざるをえないだろう。願わくは、我々の仕事が、不毛の「捨石」ではなく、せめて、次にあらわれる作家たちの「踏石」であらんことを。

このすぐれた評論集について、私がただ一つだけ佐藤氏に再考ねがいたい一節がある。それは「菜穂子」とモウリヤックの「ジェニトリクス」との関係について氏が書かれている部分だ。おそらく氏は堀氏の「創作ノート」からこの関係を思いつかれたと思うが、しかし、「ジェニトリクス」で佐藤氏がみられたものはモウリヤックの他の小説に普遍的である。堀氏はその一例として「ジェニトリクス」をとりあげたにすぎぬと私は考える。「テレーズ、デスケルウ」よりも「ジェニトリクス」の痕跡を「菜穂子」にみいだす氏の考えはユニークだが、しかし、もう一度、再考

して頂けないだろうか。それが本書についてのただ一つの私の希望である。

今後の佐藤氏のお仕事に更に期待しつつ。